



向日葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇

【Nコード】

N1823T

【作者名】

向日葵

【あらすじ】

「普通」ってなに？私は誰？きつと、誰もが考える思い。きつと誰もが持っている心の「闇」。

あなたの「闇」はあなたを飲み込んでいませんか？

第1章

私は麻美。23歳の主婦だ。

普通の主婦。子供はいない。

先日、「子供を作ろうか。」と旦那に言われた。

私は、「そうね。」とだけ返した。

子供は欲しい。かわいいし、家族が増えるなんてとてもステキなことだ。

でも・・・

私には「闇」がある。

誰にも言えない「闇」が。

私と旦那の康之が出逢ったのは2009年の2月。
私が働いていたデリヘルで、康之が私をホテルに呼んだのが始まりだ。

夜中の2時過ぎ。その日は客の流れも止まり始め、
待機していた部屋で化粧を落とし仲間とポーカーをしていた。小銭
を賭け、
ちよろちよろ勝ち始めた時だった。

「麻美ちゃん、仕事入ったよ。」

「あーい。何分の仕事？どんな人？どうせおっさんだろ？」

こんな夜中に呼ぶのは、酔っ払いのおっさんか物好きしかいない。今までの経験上そう思った。

「いや、受付で見た感じ酔っ払ってないし、かつこいい人だよ。」

珍しい。物好きも居たもんだ・・・。

「準備したら行くわ。」

羽織った毛布をたたみ、バックを持って、スタッフの居る部屋へと向かう。

「麻美ちゃん化粧くらいしてよ。」

「さつき落としたの。誰も麻美の顔なんか見ないから大丈夫だよ。」

そうスタッフと笑った。

誰も私を好きにはならない。稼いだ金と、へその下に用があるだけ。その言葉を私は飲み込み、代わりにタバコに火を点けた。煙を深く吸い込み、ゆっくり吐き出す。

さつき言いたかった言葉は、煙と一緒に換気扇に吸い込まれていった。

「部屋決まった？」

「決まったよ。90分。〇〇ホテル、403号室」

ホテルの名前と、部屋の番号、コースの時間が書かれた紙を受け取り、

私はスニーカーを履いて冷たい夜の街に繰り出した。

ホテルまでは歩いて1分の距離。顔見知りのホストの龍が

「これから仕事？」

終わったら店に来てよ。ずっと来てないでしょ？麻美に来て欲しいな。」

「わかったよ。ねえねと行くから席空けといて。」

ねえねは私と同じくらいに店で働き始めた子。

入店が近かったし、気も合ったからいつも一緒にいた。

ねえねは美鈴という源氏名で働いていた。

年が1つ上だったから、私は「ねえね」と呼んでいた。

「麻美1人じゃないの・・・？」

「いつもねえねと一緒にだからね。ねえねが行かなかったら行かないじゃあ、仕事だからもう行くわ。後で連絡する。」

「わかった。待ってるね。」

そう言って龍は自分の店に向かって歩いて行った。

ちょっと前に、ねえねから言われた。

「龍は麻美が好きなんだって。付き合っちゃえば？」

私はその時、彼氏がいたから、

「考えとく。」

と、やり過ごしたままだった。

本人から告白された訳じゃないし。ホストだし。

正直タイプじゃ無いんだよね・・・なんせ痩せ過ぎでまるっきりホスト。

そんなことを考えながらホテルに向かった。

ホテルに入ると、顔見知りになったおばちゃんに

「403号室入るね。」

「はいよー。麻美ちゃん忙しいのね。頑張つて。」

「ありがとう、おばちゃん。」

エレベーターに乗り、4階へのボタンを押した。

静かにエレベーターのドアが開く。

私は、403号室のチャイムを鳴らした。

第1章・2

ノックをして、静かにドアを開けた。本当は開けてくれるのを待たなきゃいけないけど。

待つのは苦手。それに早く終わらして、呑みに行きたかった。

奥のほうから

「はい。」

と男が歩いてきた。私は、男の顔を見ないまま、

「麻美です。お邪魔するね。」

そう言いながら部屋に入る。出てきた男の顔を見て、私はこう言っ
た。

「化粧して来れば良かった・・・。」

スタッフが「かつこよかった」とは言っていたけど、
やる気の無い私にやる気を持たせる為の、嘘だと思っていた。

でも、出てきた男は、私の「タイプ」だった。

見た目は、25歳前後、175cmくらいのちょうどいい身長。

優しいような目、高めの鼻。太り過ぎず、痩せ過ぎない身体。

そしてなんと言っても、同年代には居ない、落ち着いた雰囲気があ

った。

一目惚れだった。

「何ですつぴんで来ちゃったんだろう・・・」後悔しながら、ベツトに座った。

でも、後悔したってしょうがない。どうせ彼女いるだろうし、もう二度と会わないだろうから。

それに、私には一応彼氏がいた。後々話すつもりだけど、最低な彼氏がいた。

ベツトに座り、いつも通り店にインコールする。

「麻美ちゃん部屋入ったかな？」

「ハイ。」

「んじゃ、90分コースね。いつてらしゃい。」

「ハイ。」

店にコールしたら、タイマーをセットする。部屋にはタイマーをセットする電子音が響く。スタートボタンを押したら、私の時間が動き出す。

デリ嬢「麻美」の時間がはじまる。スタートから、タイマーを止め

るまでは

「麻美」はこの人の「彼女」になる。

私はスタートボタンを押した。

第1章・3

「化粧もしないで来てごめんね。いつもだとこの時間は、酔っ払いのおっさんばかりだからさ。こんな若い人来るとは思わなくて。まあ、

ほとんどすっぱんなんだけど。」

「ははは、いいよ。ちょっと写真とイメージと違うからびっくりしたけど、話しやすい感じでよかった。」

「イメージ違うってどっち？いい方？悪い方？写真より不細工かな？」

「いや、写真も可愛いけど、実物の方が可愛いと思うよ。大丈夫。自信もちなよ。」

「ほんと？良かった。そんなこと言われたこと無いから嬉しいな。」

私はそう言った。嘘だった。自慢じゃないけど、よく言われる。「可愛いね」「写真よりタイプ」って。

「またまた。よく言われるでしょ？」

「そんなこと無いよ。」

私は微笑んで、バックからタバコを取り出した。

テーブルを見ると、灰皿には吸殻が2本あった。

「タバコ吸うんだ？麻美も吸っていいかな？あと、なんて呼べばいい？」

「タバコ吸うよ。俺は、康之。好きに呼んでいいよ。麻美ちゃん何歳？」

「んじゃあ、やっちゃんて呼ぶ。麻美ちゃんは19歳ですよ。」

「未成年じゃん。タバコいつから吸ってるの？」

「麻美は中学くらいからかな？内緒だよ？」

「はは。麻美ちゃんは見かけによらず不良なんだね。」

「ひひひ。そんなことないよ？どこからどう見ても真面目でしょう？」

お互い笑いながらタバコに火をつけた。

ふと康之のタバコを見ると、私の知らないタバコを吸っていた。

「珍しいタバコ吸ってるね。後で1本ちょうだい？」

「いいよ。でもみんな不味いって言うけどいい？」

「いいよ。吸ったこと無いから、吸ってみたい。」

「わかった。後でね。」

私は頷いて、短くなったタバコの火を消した。まだタバコを吸ってる康之に、

「彼女はいるの？」

と聞いた。康之はタバコを消しながら、

「彼女はいないよ。麻美ちゃんはいるの？」

と言った。もちろん私は、

「いないよ。麻美可愛くないし。」

笑いながら答えた。この仕事をしていて、「彼氏います」なんていったら、

「仕事する気ありません」って言ってるのと同じ。二度と呼ばれなくなってしまう。

それに、「彼氏いる」って言った次の日には、サイトの書き込みに散々書かれてしまう。

そうなるとめんどくさい。嘘をつくよりめんどくさい事態になるから、

「彼氏がいます」とは言わないことにしていた。変わりにいつも言う言葉をプレゼントした。

「それに、風俗で働いてる女の子を彼女にしたい男の人はいないよ。」

そう言った。ほんとのことだ。仕事中に告白されたことがある。何回もあるけど、必ず言われるのが、「風俗はやめてくれ」。

確かに自分の彼女が風俗で働いていたら、ちょっと気まずい。
私が男だったら、私も同じことを言う。まあ、しょうがないことだ
けど。

「そっか。可愛いのかなあ。」

康之はそう言った。

「そうなの。しょうがないよね。そろそろシャワー浴びようか。」

私は服を脱ぎ始めた。

「やつちゃんも脱いで？麻美だけ脱ぐのは恥ずかしいよ。」

「わかった。俺太ってるから、あんま見ないでね？俺も恥ずかしい。」

「

「ははは、大丈夫！麻美もデブだから、見ないでね？」

笑いながら二人で服を脱いだ。

第1章・4

二人で狭い脱衣所に入る。私は素早く服を脱ぎ、シャワーを出す。熱めのシャワーをサツと浴び、康之を待つ。入ってきた康之は恥ずかしそうにしていた。

「太っている」と言っていた康之の身体は思っていたよりすらつとしていたけど、ちよつと柔らかさうなお腹だった。

「気持ちよさそうなお腹だなあ」なんて考えながら、シャワーの調節をしていた。

さつきより少しぬるくしたお湯を康之の手に流し、

「熱くない？大丈夫？」

と聞いた。今までの経験上男は、ぬるめのお湯がいいとわかっていた。

だから、自分でちよつどいい温度より若干ぬるめに設定する。

「ちよつどいいよ。」

康之も、みんなと同じくらいの温度で納得した。身体にシャワーをかけながら聞いた。

「こつゆうお店は初めて？」

康之は恥ずかしそうに、

「初めてだよ。デリヘルは初めて。」

「そうなんだ。初デリが麻美でごめんね。」

私は笑いながら、謝った。シャワーをスタンドに掛け、ボディソープを手にとり泡立てる。慣れたもんだ。

泡立てたボディソープを両手に広げ、康之の身体を洗い始める。

首筋から胸へ、胸から股間へ手を伸ばす。泡で包み込むように康之の大事なところを洗っていく。優しく、撫でるように。

小さかったモノが少しずつ大きくなっていく。

ボディソープを流し、康之の手をとる。手の平にボディソープをとり、

「麻美も綺麗にしてくれる？」

そういつて背中を向けた。康之の大きい手が私の背中をすべるように撫でる。

背中から前へ、わきの下から胸に向かってすべる。後ろから抱きしめられる形になり、

康之の手は私の股間に吸い込まれる。私の背中と、康之のお腹がくっついてあったかい。

康之の手が私の大事なところを優しくこする。泡がオイルの代わりになって気持ちいい。

「あっ・・・」

私は思わず小さな声を漏らした。

「ありがとう、続きはベットで・・・しよ？」

「うん。わかった。」

お互い目を合わせないで泡を流した。

なぜかすごく恥ずかしかった。今までこんなこと無かったのに。いつも感じたフリをする。そうするとエッチな雰囲気になって、男の人が勃起やすくなるから。でも、さっきのは違った。

本当に気持ちよかった。

初めての経験だった。初めて会う男の人に触られて「気持ちいいと感じたのは。」

今までは「早く終わらせたい。気持ち悪い」って思うのが普通だった。

正直に言うと、エッチは好きじゃなかった。

私の中でエッチは「女の義務」みたいなイメージで、いったこともなかった。

それが普通だと思っていた。

だからこの時、私はおかしくなっちゃったのかと思った。

「背中拭いてあげる。」

といいながら、タオルを取った。

「うん。ありがとう。」

康之は背中を向けた。康之の背中がっしりしていて広がった。

康之の背中を拭いた私は、タオルを康之に渡し、自分の身体を拭いた。

私はいつも背中を濡れたままにしてしまう。

いつものように背中を拭き忘れたまま、ベットに向かおうとすると康之が

「背中濡れてるから、拭いてあげる。」

そう言って優しく拭いてくれた。

「ありがとう。優しいんだね。」

私がそう言つと、康之は

「どういたしまして。」

と笑った。笑った康之の顔には可愛いえくぼが出来ていて、私はつられて笑顔になった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1823t/>

闇

2011年10月9日00時49分発行